

令和5年度 東京都立大崎高等学校 全日制課程 学校経営報告

東京都立大崎高等学校長
鶴田 秀樹

1 学校運営の評価

コロナ感染症が2類から5類に変わり、通常の学校運営に戻す1年であった。特に本校の特色の一つである特進クラスについて、4年制大学を一般入試で突破するという目標を掲げた。生徒ニーズに合わせ、土曜講習に選択制を導入した。学習指導の効果を上げるため、勉強マラソンでは外部講師の活用を取り入れた。学校生活満足度は85.1%となり、前年度から上昇した。

(1) 成果

- ア 創立110周年記念式典実施により、生徒、保護者、教職員の学校結束意識の醸成
- イ 多文化共生海外派遣研修（アラブ首長国連邦）を通じ、国際化の醸成
- ウ 体育健康教育推進校（1年目）としての取組活動を推進
- エ 学校見学・説明会 全8回実施 参加者 延べ2837名
 - 推薦に基づく選抜 倍率 一般3.3倍 特別推薦2.83倍
 - 学力に基づく選抜 倍率 1.52倍

(2) 課題

- ア 統合型支援システム導入等に伴う教務部業務の負担増
- イ 受検生のニーズに応える授業や部活動の体験型説明会の一層の拡充
- ウ 生産性向上と業務軽減を目的とした校内環境（職員室等）の強化

2 学習指導の評価

観点別評価の円滑導入に向け、教科主任会議を計画的に実施するとともに、成績会議等においても、各教科の課題を共有し、共通理解を図った。授業満足度74.2%

(1) 成果

- ア 朝のホームルームでは、集中力を高める時間を確保し、学習意欲を向上させた。
- イ 各定期考査や小テストの結果から生徒の習熟度を適切に把握し、クラスを適宜再編成することで基礎学力と学習意欲を効果的に高めた。
- ウ 観点別評価の導入に伴い、教科主任会を主軸として各教科で評価方法を改善・確認し、成績会議において正しく評価できる体制を確立した。
- エ 各教科（公民、家庭、総合的な探究の時間、人間と社会）及び各学年（特別活動等）と連携し、主権者及び消費者としての意識の醸成を図った。
- オ 探求委員会が基幹となり、大学との連携による「総合的な探究の時間」を実現した。

(2) 課題

- ア 学校への不適応から通信制課程へ転向する生徒が増加した。
- イ 大学進学に向けての教育課程における履修学年・設置科目の見直し
- ウ 生徒の探求活動を支援する教員向け研修会の実施と探求モデルの開発

3 生活指導の評価

朝の正門での遅刻指導や服装指導をおこない、一貫した対応で安心・安全な学校生活を維持した。生徒間のトラブルもなく、良好な人間関係を構築した。

一方で、複雑な家庭環境が要因となり、家庭におけるネグレクト等があるため、外部連携機関などとの継続的な連携が必要と判断する。生活指導満足度90.7%

(1) 成果

- ア 挨拶運動、校内掲示用の SNS 不適切使用の注意喚起ポスターなど、生徒会が主体的に取り組む、暴力・いじめ等の発生を抑えた。
- イ 学年、養護教諭、SC、管理職の連携による教育相談体制は、親子関係等、生徒の生活課題解決に向けて効果を発揮した。
- ウ 生活指導部主任の強いリーダーシップを基盤に、各行事担当者の冷静な判断で、体育祭、文化祭、強歩遠足の3大行事を充実した取組として実現させた。

(2) 課題

- ア 保護者からの過剰な苦情や不当な要求と併せて、無関心、過干渉などに対する教員対応力の向上と理解啓発の実施。
- イ インフルエンザ蔓延による、学級・学年閉鎖など、感染対策に適した正確な対応
- ウ 本校の生活指導について理解不足の保護者の現状を踏まえ、指導方針を本校の特色として価値付けられるよう入学前説明内容の充実化。

4 進路指導の評価

進学・就職問わず、進路実現に向けての計画的な支援を基盤に、生徒の可能性を引き出す対応を継続させた。特に、共通テスト受験で大学進学を目指す生徒へは、大学入試改革の経緯や背景などについて進路便りを通して適切に理解促進を図った。進路指導満足度 90.3%

(1) 成果

- ア 特進クラスの生徒の学習意欲を学年全体の学力向上へと寄与させ、一般受験大学進学を目指す確かな学力を身に付けられるよう学年との連携を図った。
四年制大学進学率 70%以上 進路決定率 94.7% 共通テスト受験者 182 名
GMARCH 合格者 12 名 成成武明合格者 12 名 日東駒専合格者 55 名
- イ 進路便り「一意専心」を 12 回発行し、生徒の進学意識を着実に高めた。
- ウ 生徒が自己の弱みを捉える貴重な資料とするため、模擬試験を 1・2 学年 5 回、3 学年 8 回実施した。
- エ 桜美林大学等と連携し、情報が氾濫する現代社会において自己の興味・関心を追求することの大切さへ理解を深めさせ、探求活動の充実を図った。
- オ 勉強マラソン（勉強合宿）は、2 日間で 15 時間学習し、学びの習慣を定着させた。

(2) 課題

- ア 進路規定についての継続的な見直しや検討
- イ 特進クラスについて、1 学年における設置の見直し
- ウ 一人一台端末導入に伴う、進路の行事や学習における活用機会の更なる確保
- エ C4th 導入による調査書作成について学年との連携強化

5 特別活動の評価

生活指導部と学年が連携して学校生活における生徒のモチベーション維持に努めた。部活動や委員会活動、学校行事の準備等、仲間と協同で充実させる活動は、学校全体の帰属意識の醸成に大きく寄与した。また、修学旅行や校外学習、地域ボランティア活動等も盛んに実施し、大きな成果を得た。

(1) 成果

- ア 一人一役の役割で臨ませた学校行事への取組は、クラスの団結心を強めたことで人間関係のトラブルはなかった。
- イ 地域保育園との連携による体験型防災訓練を実施し、各生徒は、幼児を保護・見守り等の役割を任せることで地域貢献についての意識を効果的に高めた。
- ウ 練習時間の確保や校外練習を積極的に勧めるなど最大限の支援を保証したことで各部活動が輝かしい功績を残した。部活動加入率 82%

(2) 課題

- ア 部活動指導員の拡充など、部活動支援方法の検討
- イ オンライン学習デーの円滑実施に向けた各教科、各学年、各分掌との連携
- ウ タフな人材の育成のための部活動を積極的に奨励、部活動相互の連携強化

6 その他の評価

(1) 成果

- ア 2020レガシーとして、部活動指導員12名、外部指導員4名を確保し、運動系、文化系を問わず活発に活動した。
- イ 育児、介護、健康を優先とするための制度活用、及び計画的年休の取得など働き方改革を進めていくことで労働意識の醸成を図った。
- ウ 猛暑対策のため冷風機をレンタル導入するなど、経営企画室との連携を適切に図った。

(2) 課題

- ア 特別な支援を必要とする生徒やその家庭への対応についての共通理解
- イ 笑顔プロジェクト等の都教委施策の円滑な実施
- ウ 育児等制度活用における講師等の補充不足への対応
- エ キャリア育成や進路開発のための学校図書館の機能充実化
- オ ライフ・ワーク・バランスの継続化（「残業1時間限定デー」の推進）